

自存自衛のための開戦

明らかにアメリカ自身もハルノートは宣戦布告と考えているのであります。これはアメリカでも問題になっていきます。どういふことかと申しますと、十一月二十七日には戦争体制に入っており、開戦の秘密指令も出しているのですが、これは大統領や一部の人間だけが知っていて、議会には何も言っていないし、国民にも知らされていない、これは重大なる国民への背信行為だということです。

そうしたことをアメリカの歴史学会の会長でもある、権威ある歴史学者のピアード博士は『ルーズベルト大統領と一九四一年の開戦』という本に書いています。この本には今まで申したことが詳しく書かれています。これが日本語訳で発行されれば正しい事実がかなり分かったのですが、勿論マッカーサーは翻訳を禁止し、いまだに日本文にはなっておりません。（但し、平泉澄先生等が原文で読まれて、原文の抄訳を出しておられます。）とにかくピアード博士は「ルーズベルト大統領は真珠湾攻撃を百も承知だった」と書いています。またアメリカでルーズベルトに対する査問委員会が開かれるのですが、大統領の反対党（野党）の共和党は、委員会の人数からして少なく、政治工作でルーズベルトは無罪になったこと等も書かれています。ジョン・トーランドも『真珠湾攻撃』という本で、この間の事情を詳しく書いております。この本ではスティムソンは真珠湾攻撃も知っていたと立証しています。

日本では、ハルノートを突きつけられて、十二月一日に御前会議が開かれます。そしてこの御前会議で日米開戦やむなしと、全員一致で可決します。この時誰一人反対するものはありませんでした。

以上が大東亜戦争に至る経緯であります。いったいこのどこに侵略性があるのでしょうか。「開戦の詔勅」にある通り、わが国は自存自衛のために、まさにやむを得ずして立たざるを得なかったのであります。